

花びらに書く

山
本
利
達

要 旨

平安朝の仮名文学作品に、「花びら」に歌や歌句を書いたと表現されていることがある。その時、「花びら」は、実の花びらであるとも、造花であるとも、説がわかれることがある。また「書く」のは、花びらに直接書くのだとも、短冊の類に書いてつけるのだとも、両説がある。

用例についてみたところ、「花びらに書く」という時、「花びら」は実の花の場合と、造花の場合がある。しかし、造花に書いたと考えられる場合はあるが、実の花びらに直接書いたと考えられるものはないように思われる。花びらに書いたと表現される場合、造花の花びらに直接書く以外は、歌や歌句を書いた短冊の類を、実の花、または造花の小枝につけたものと考えられ、「花びらに書く」とは、そういうふう理解する言語環境での表現であったと考えられる。

一

長徳元年（九九五）四月十日、関白藤原道隆がなくなった。四月二十七日、右大臣道兼が関白となったが、五月八日になくなった。五月十一日には、大納言道長に内覧の宣旨が下り、六月十九日には、道長は右大臣となった。その後、道長と、内大臣伊周および中納言隆家との間には不穏な事件が続いておこった。

長徳二年一月十六日、伊周と隆家の従者が花山法皇を射るといふ事がおこり、四月二十四日には、伊周は太宰権帥

に、隆家は出雲権守に配流せられ、五月一日には、中宮定子自ら髪を切るということになった。六月九日には、中宮御所の二条北宮が焼け、中宮は高階明順の邸に移り、その後、小二条殿に移った。

かくして、定子の後宮は、かつての華かさを失うようになっていったが、清少納言は道長方の人物だとささやかれ、女房達から白眼視されることがあって、里に帰って籠ることになった。次の文は、その頃のことを述べたものである。

(一) 殿などのおはしまさで後、世の中に事出で来、さわがしうなりて、宮もまゐらせ給はず、小二条殿といふ所におはしますに、なにともなくうたてありしかば、ひさしう里にゐたり。御前わたりのおほつかなきにこそ、なほえ絶えてあるまじかりける。

右中将おはして、物語し給ふ。「今日宮にまゐりたりつれば、いみじうものこそあはれなりつれ。女房の装束、裳・唐衣をりにあひ、たゆまでさぶらふかな。御簾のそばのあきたりつるより見入れつれば、八九人ばかり、朽葉の唐衣、薄色の裳に、紫苑・萩など、をかしうて居並みたりつるかな。御前の草のいとしげきを、「などか、かきはらはせてこそ」といひつれば、「ことさら露置かせて御覽すとて」と、宰相の君の声にていらへつるが、をかしうもおぼえつるかな。「御里居いと心憂し。かかる所に住ませ給はんほどは、いみじきことありとも、かならずさぶらふべきものにおぼしめされたるに、かひなく」と、あまたいひつる、語り聞かせてまつれとなめりかし。まゐりて見給へ。あはれなりつる所のさまかな。台の前に植ゑられたりける牡丹などのをかききこと」などのたまふ。「いさ、人のにくしとおもひたりしが、またにくくおぼえ侍りしかば」といらへきこゆ。「おいらかにも」とてわらひ給ふ。

げにいかならんと、思ひまゐらす。御けしきにはあらで、さぶらふ人たちなどの、「左の大殿がたの人、知る

すぢにてあり」とて、さしつどひものなどいふも、下よりまめる見ては、ふといひやみ、放ち出でたるけしきなるが、見ならはずにくければ、「まぬれ」など、たびたびある仰せ言をも過して、げにひさしくなりにけるを、また、宮の辺には、ただあなたがたにいひなして、そら言なども出で来べし。

例ならず仰せ言などもなくて日頃になれば、心ほそくてうちながむるほどに、長女せきめ文を持って来たり。「御前より、宰相の君して、忍びて賜はせたりつる」といひて、ここにてさへひき忍ぶるもあまりなり。人づての仰せ書きにはあらぬなめりと、胸つぶれて、とく開けたれば、紙にはものも書かせ給はず、山吹の花びらただ一重をつつませ給へり。それに、「いはで思ふぞ」と書かせ給へる、いみじう、日頃の絶え間なげかれつる、みな慰めてうれしきに、長女もうちまもりて、「御前には、いかが、もののをりごとに、おぼし出できこえさせ給ふなるものを。誰もあやしき御長居とこそ侍るめれ。なかはまるらせ給はぬ」といひて、「ここなる所に、あからさまにまかりて、まゐらむ」といひて往ぬるのち、御返りごと書きてまゐらせんとするに、この歌の本さらにわすれたり。「いとあやしおなじふることといひながら、知らぬ人やはある。ただここもとにおほえながら、いひ出でられぬはいかにぞや」などいふを聞きて、前にゐたるが、「下ゆく水」とこそ申せ」といひたる、などかくわすれつるならむ。これに教へらるるもをかし。(枕草子「殿などのおはしまさで後」一九九—二〇一頁。—大系だいけいによる。以下同じ)。

中宮定子から、里居の清少納言への使者に、「山吹の花びらただ一重」を包んで託したことについて、「春曙抄はるあけ」は、「山吹は口なし色なればいはで思ふといふ心なるべし」といい、「盤斎抄ばんさい」は、「山吹の花びらとは、口なしの色と歌にもよみ侍れば、いはでおもふといふよせに、おくらせ給ふ也」といつている。古今集の一〇一、素性の「山吹の花色衣ぬしやたれとへど答へずくちなしにして」により、中宮が口には出さずに清少納言を恋しく思っている意を伝えた

解しているのである。『金子評釈』に「口無し」の意を寓せたり。山吹の花は山梔くらなづき色なればなり、『塩田評釈』の「山吹の梔子色から口無しにかけた」、『全集』の「口無し」の意を寓したものと、同じ注も、同じ趣旨らしい。

『解環』では、中宮が、古今集の素性の歌を踏まえ、「何の仰せ言も料紙には書かぬ「口無し」の態度を説明し」と述べられている。山吹の花びらは、「口無し」の意を喚起し、中宮の言葉の書かれていないことを説明したものと解していられる。

ところが、後藤祥子氏は、「中宮定子が白紙に包んでよこした山吹の花びら一重の寓意は、里下りしたまま呼び出しに応じない作者に、『古今集』誹諧歌、素性の、「山吹のはな色衣ぬしやたれ問へど答へずくちなしにして」と云いやったものであった」と述べていられる。前掲の説と同じく、素性の歌によりながら、中宮の「まゐれ」との度々の仰せ言に「口無し」をなじったものとの読み方である。素性の歌によった寓意というなら、「口無し」は中宮自らのことではなく、相手の「口無し」をいうことになろう。

素性の歌により、中宮が口には出さずに清少納言を恋しく思っている意を寓したとする先の説に対し、『大系』は異を立て、次のように述べられている。

通説に、山吹はくちなし色ゆえ口無しくちなしいろゆえくちなしの意を寓するとするが、「いはで思ふぞ」の歌とも重複し、従いがたい。拾遺集、一春に読人しらずとして「わがやどの八重山吹は一重だに散り残らん春のかたみに」（倭漢朗詠集、歎冬にもある）とあり、中宮は秋の庭にただ一重散り残る山吹の花に清少納言の変らぬ真心を期待され、作者もまたその歌の意より中宮の知己に感激したと解すべきであろう。

清少納言に右中将経房の語ったところによれば、中宮の女房達の衣裳は、朽葉の唐衣、薄色の裳、紫苑、萩などであ

り、秋のものであった。従って今の季節は秋である。晩春の花である山吹が、ただ一重でも散り残っていることは一般にはありえない。しかし、「山吹の花びらただ一重」が包まれていたのであり、それは「わがやどの」の歌により「一重だに」といい、「散り残らん」と希望することによって、清少納言に離れないでほしいという気持が伝えられたものである。『全講』、『全注釈』、『新大系』は『大系』の説によつていられる。

「山吹の花びらただ一重」が包まれていたことの趣旨は、『大系』等の説の通りであろうと思われるが、秋といふ今の季節における山吹の花をどう理解するかについては、『大系』のように、中宮の庭に散り残つていたということを受け入れがたい。

『全集』の頭注では、「山吹は晩春のものなので先の女房の衣裳とはそぐわない。あるいは、秋の返り咲きか、山吹の花びら形に切つた紙か絹か」と述べられ、『新全集』では、「ここを春の山吹と見て、作者の里居が翌年の春にまで及んだと見る最近の考えもある」という説が加えられている。

秋に山吹が返り咲きをしたものとの考えは、『解環』で強く主張されている。しかし、返り咲きは秋毎にあるものではなく、稀なことである。もし返り咲きなら、それとわかる表現がなされるであろう。『新全集』にあげられた、里居が翌年の春まで及んだものとする説は未見であるが、経房が訪れたのが秋であること、年を越えたことを思わせる記事のないことから認めがたい。『全集』に「山吹の花びら形に切つた紙か絹か」と述べていられるように、山吹の花びらは作り物だったと考えるべきものと思われる。後撰集一三〇五の詞書に、「あひ知りて侍ける人の東の方へまかりけるに、桜の花のかたにぬさをしてつかはしける」とある。紙あるいは絹を桜の花びらの形に作つて幣として送つたことがわかる。花びらの作り物の例といえよう。

(二)清水にこもりたりしに、わざと御使して賜はせたりし、唐の紙のあかみたるに、草にて

「山ちかき入相の鐘の声ごとくに恋ふる心の数は知るらん

ものを、こよなる長居や」とぞ書かせ給へる。紙などのなめげならぬも、とり忘れたる旅にて、むらさきなる蓮の花びらに書きてまゐらす。(枕草子「清水にこもりたりしに」二六三―二六四頁)

右の「むらさきなる蓮の花びら」は、諸注すべて散華に用いられる紙製のものと説明している。「むらさきなる」という語が、作り物であることを思わせはするが、散華に用いる作り物の花びらとはいっていない。源氏物語「鈴虫」の巻で、女三宮の持仏開眼供養において、「閻伽の具は、例のきはやかに小さくて、青き、白き、紫の蓮をととのへて」とある。青、白、紫の蓮も作り物と考えられる。

(三) ことはじまりて、一切経を蓮の花の赤き一花づつに入れて、僧俗・上達部・殿上人・地下・六位、なにくれまで、持てつづきたる、いみじう尊し。(枕草子「閻白殿、二月廿一日に」二九九頁)

この文中の「蓮の花の赤き」についても、諸注はすべて、蓮を形どった造花と解している。能因本や前田本には、「蓮の花の赤きに一部づつ入れて」とある。一切経を蓮の一輪に一巻ずつ入れたのであって、造花でなくては無理なことが考えられる。(二)の「むらさきなる蓮の花びら」においても、(三)の「蓮の花の赤き一花づつ」においても、造花といっではないが、造花と理解される言語環境にあったものといえよう。

(四) 菩提といふ寺に、結縁の八講せしにまうでたるに、人のもとより「とく帰り給ひね。いとさうさうし」といひたれば、蓮の葉のうらに、

もとめてもかかるはちすの露をおきてうき世にまたはかへるものかは

と書きてやりつ。

まことに、いとたふとくあはれなれば、やがてとまりぬべくおほゆるに、さうちうが家の人のもどかしさも忘れぬべし。(枕草子「菩提といふ寺に」七六頁)

この「蓮の葉のうら」は、能因本に「はすの花びらに」、前田本に「はちすの花の中に」とある。「大系」の頭注では、能因本によれば、散華に用いる花びらと解されるとある。(二)(三)に(四)の能因本が加われば、共に蓮の造花の例ではあるが、造花といわなくても造花と理解される言語環境にあつたといえよう。(一)の山吹の花びらは、時が秋であるということから、作り物であつたと解せられる。それは実物大でなくてもよい。「いはておもふぞ」と書ける大きさであつたらう。

二

(五)雨は夜一夜ふりあかして、またのつとめてぞすこし空はれたる。男は、女のいらむとするを、「ただかくて」といれず。日も高うなれば、この女の親、少将に饗あそびすべきかたのなかりければ、小舎人童ばかりとゞめたりけるに、堅い塩さかなにして酒をのませて、少将には、ひろき庭に生いたる菜を摘みて、蒸し物といふものにして、丁わんにもりて、はしには梅の花さかりなるを折りて、その花はなびらにおかしげなる女の手にて書けり。

君がため衣の裾をぬらしつつ春の野にいでてつめる若菜ぞ

男これをみるにいとあはれに覚えてひきよせて食ふ。女わりなう恥しとおもひて臥したり。(大和物語一七三段―「日

本古典文学大系』による)

右の「その花瓣に、いとおかしげなる女の手にて書けり」に関して、今井源衛氏は『大和物語評釈』において、次のように述べていられる。

なお、本段には梅の花びらに歌を書くことが見えているが、山吹の花びらに歌を書くことは、『枕草子』百三十八段「殿などのおはしまさで後」に、中宮が山吹の花びらに「いはで思ふぞ」と書いて、清少納言におくったことが見え、同じく二百二十七段「清水に籠りたりしに」には、中宮への返事を造花の蓮の花びらに書いたことが見える。又、『源氏物語』紅葉賀巻にも、藤壺が光源氏への返歌を、王命婦のすすめで、源氏からおくられてきた撫子の花びらに書くことが見える。どうやら一条朝ごろの流行だったのではなからうか。

柿本奨氏は『大和物語の注釈と研究』において、「花びらに歌句を書くのは『評釈』に指摘する如く」として、今井氏の挙例を引いて、更に次のように述べていられる。

『鈔』に「花ある所にたんざくにかくなり」と言い、『直解』に「花びらひとつに歌を一句づ、など女の母のかき出せるなるべし」と言う。『鈔』は短冊に書いて枝に結びつけたとし、『直解』はじかに書き付けたとする。語としての「書き付く」にはその二義がある。上掲諸例はじかに書いたようで、花びらに墨が乗るか懸念され、造花であるかもしれないが、当例は造花ではない。

今井氏の挙げられた枕草子の例についての読み方は先に述べたので、「紅葉賀」の巻の例について検討しよう。

(六)わが御かたに臥したまひて、胸のやるかたなきほど過ぐして、大殿へとおほす。御前の前裁の、何となくあをみわたれるなかに、常夏のはなやかに咲き出でたるを折らせたまひて、命婦の君のもとに、書きたまふこと多かるべし。

「よそへつつ見るに心はなぐさまで露けさまさるなでしこの花

花に咲かなむと思ひたまへしも、かひなき世にはべりければ」とあり。さりぬべき隙にやありけむ、御覽せさせて、「ただ塵ばかり、この花びらに」と聞こゆるを、わが御心にも、ものいとあはれにおぼし知らるるほどにて、

袖濡るる露のゆかりと思ふにもなほ疎まれぬやまとなでしこ

とばかり、ほのかに書きさしたるやうなるを、よろこびながらたてまつれる、例のことなればしるしあらじかしと、くづほれてながめ臥したまへるに、胸うち騒ぎて、いみじくうれしきにも涙おちぬ。(紅葉賀二八―二九頁―新潮日本古典集成による)

源氏の「よそへつつ」の歌は、恵子女王が、愛子義孝に宮中から撫子につけて送った「よそへつつみれどつゆだになぐさまざいかがはすべきなでしこのはな」(義孝集七三)によつており、「花に咲かなむ」は、後撰集一九九、読人しらずの「わがやどのかきねにうゑしなでしこは花にさかなんよそへつつ見む」を引いていることは、諸注の指摘するところである。撫子に若宮をよそえても、源氏の心は慰まずやるせないことを藤壺に訴えたので、王命婦は、この撫子に寄せて、ただ一言でもお返事をと藤壺に返事をうながしたのであつて、撫子に因んだ凡河内躬恒の「塵をだに据ゑじとぞ思ふ咲きしより妹とわがぬる常夏の花」(古今集一六七)の「塵をだに」の語から「ただ塵ばかり」と言い、撫子の縁で「この花びらに」と風流に言いなしたものである。送られた花に歌を書いて返しをすることはないであらう。

柿本氏は、「書きつく」という表現には、短冊に歌を書いて花の枝に結びつける場合と、花にじかに書く場合があることをいわれ、また、花にじかに書いては墨が乗るか懸念されるので、今井氏の挙げられた諸例は造花かもしれ

ないがといわれながら、(五)の場合は造花ではなく梅の花にじかに書いたものと述べられた。本文に、「折りて、その花瓣に：書けり」とあることから、じかに書いたものと判断されたようである。それでは、じかに書く場合、具体的にどう考えられたのであろうか。花瓣に墨が乗らぬことはない。「直解」にいうように、花瓣一枚に一句ずつを一輪の外側に書いたと考えられたのであろうか。あるいは、幾つかの花の花瓣に一字ずつ書いたというのであろうか。いずれにしても、容易には読み下しにくいであろう。男が読んで「いとあはれに覚え」るには、判読しやすくなくてはなるまい。梅のような小さな花瓣に、文字を何字も書きつけては、花の色が台無しになろう。「鈔」のいうように、短冊に書いて花の枝に付けたものと解する言語環境での表現ではなからうか。歌は若菜を詠み、梅に関係あるものではなく、梅は心葉の役目であったのであろう。

(七)かくて、源宰相は、なほかの兵衛の君に思ふことを語らひつつ、「夢ばかりの御返りをだに見せ給へ」となむ宣ひける。花桜のいと面白き花びらに、

「思ふこと知らせてしがな花桜風だに君に見せずやあるらむ

これをだに」とて書いて、兵衛に、「これ、御覽せさせ給へ」とて取らすれば、「いと恐ろしきこと。かかる聞こえあらば、兵衛が身は何の塵土ちりつちにかならむ」ときこゆれば、「何の異なる事きこえさせたらばこそあらめ、花御覽せさすばかりにこそ。何心ありてとかは見ゆる。なほ、おいらかに参り給へ」兵衛「さらば、賜はらむかし。例の、おほかかなうこそあらめ」とて、取りて、御前にて書きつく。

ほのかには風の便りに見しかどもいづれの枝と知らずぞありける

と書き、「かくいひたらば」などきこゆれば、「誰ぞ、君をかくいふらむは」など宣ふ。(宇津保物語「藤原の君」

八七―八八頁―角川文庫による)

源宰相実忠が、あて宮への文を桜の花につけて兵衛の君にことづけたところである。「花びらに」「書いて」という表現からは、桜の花びらにじかに書きつけたようにもとれようが、当時の桜は山桜系のもので、葉が出てから花が咲くから、花瓣の下に短冊の類をつけることを、花びらに書くといったのであろう。

(八) 俊綱朝臣たびたびふみつかはしけれど、かへりごともせざりけるを、なほなどいひはべりければ、さくらのはなにかきてつかはしける 近衛姫君

「ちらさじとおもふあまりにさくらばなごとのはをさへをしみつるかな (後拾遺集九四二)

この「さくらのはなにかきて」も、「ちらさじ」の歌を文に書いて、桜の花の枝につけたのであろう。

(九) 九月九日、わたかづけたる菊にかきて、女に

おいもせずしなずときくもなにかせんあふくすりぞとおもはましかば (為信集一四六)

この「わたかづけたる菊にかきて」は、菊の着せ綿をつけた菊の花にじかに書きつけたというように読めるが、「わたかづけたる菊」の花に「おいもせず」の歌を書いた文をつけて女に贈った意に解する言語環境における表現といふべきであろう。

三

「天徳四年内裏歌合」の題は、「露、鶯、桜、欵冬、藤、暮春、首夏、卯花、郭公、夏草、恋」であった。その左方の歌の書き方を見てみよう。

(一)左、講師右兵衛督源延光よりて、洲浜の覆ひをすこしひき上げて、山吹の花の枝の一尺ばかりある金して造れるを執りて捧げてゐたり。花瓣はなびらに歌は書いたるべし。ともかくもせで捧げて、夜一夜ゐたり。(天徳内裏歌合『仮名日記甲』九五頁—日本古典文学大系『歌合集』による。以下同じ)

これは献じられた歌を左方の講師が読む時のさまを述べた『仮名日記甲』の記事である。左方の講師は、金で造つた山吹の花の一尺程の枝を手にとつて、披講の間一晚中捧げていたが、歌は山吹の花びらに書いていたのだらうと、この日記の筆者は推量している。この推量するところは、山吹の造花の花びらにどのように歌を書いたというのである。左方の歌の書かれたさまは、他の記録によれば次の通りである。

(二)供_レ燈兼立_二篝火於_三南北小庭。令_レ召_レ可_レ読_レ歌人。左方、右兵衛督延光朝臣、右方、右近中将博雅朝臣、進就_二洲浜下_一、読_二其和歌。左ハ金ノ山吹ノ花ノ枝ヲ作ツテ、其ノ葉ニ書キ、右ハ小サク色紙ニ書ク。(『御記』八九頁)

(三)左方(左方)童女四人舁_二洲浜立_一地敷。(洲浜之様ハ(中略)其ノ中ニ銀ノ鶴欵冬ノ一枝ヲ含ム。黄金ヲ以ツテ八重ノ葩ヲ作り、青銀ヲ以ツテ数片ノ葉ヲ作ル。葉毎ニ各々一首ヲ書ク(『殿上日記』九二頁)

(四)左、髻うぶ四人、赤色の表衣に桜襲の襖子着て、歌は洲浜に金の花・銀の葉したる山吹の葉に書きたり。(『仮名日記乙』

九八頁)

(四)左の歌、黄昏時に奉る。その洲浜は、沈の山、鏡を水にして。洲にも銀の鶴二つ立てて、金の山吹に銀の葉に、歌は鶴にくはせたり。(『仮名日記丙』一〇一頁)

(二) (四)によれば、左方の洲浜には、山吹があり、その花は金造り、葉は銀造りであった。(四)は歌が何に書かれたのか読み取りにくい(一) (二) (三)は歌は葉に書いたという。(三)は葉毎に一首を書いたという。銀製の葉にじかに書いたとすれば、脂燭を用いても読みづらであろう。葉に彫りつけたのなら、書くとはいわないであろう。(八)や(九)の例と同様短冊類に書いて葉の傍につけたのを葉に書くとは表現したのである。

(二)によれば「右ハ小サク色紙ニ書ク」、また『殿上日記』には、「(右方の) 献ズル所ノ歌ハ色紙ニ小字ニ書ケリ。花樹ヲ詠ズルノ歌ハ各々其ノ樹ニ結び、好鳥ニ題スルノ什ハ又其ノ鳥ノ嘴ニ含ミ持タシム。……」(九一頁)とある。右の歌は、色紙に小字で書いて、花の歌は花の樹に結び、鳥の歌は鳥の嘴に持たせなどした。『仮名日記甲』は、「(右方の) 歌は、銀金を造り花にして、歌に従ひつ、枝につけたり。恋の歌は鶉舟にして篝火に入れたり。暮の春は舟につみたり。鶯のは鶯くひたり。さまざまにつけてしたり」(九四頁)という。右方の歌は、題に関係ある事物に、「つけたり」「入れたり」「つみたり」「くひたり」といって、色紙に書いたことは述べていない。こういう『仮名日記甲』の表現の仕方を思うと、左方の講師が(二)にいうように、一尺ばかりの金造りの山吹の枝を手にとつて歌を読みあげたことから、「花瓣に歌は書いたるべし」と推量することになったのであろう。その筆者にとつては、歌は右方のように、色紙に小字に書いて花瓣につけてあるものと考える風習の中に生きていたのだといえよう。

花や花びらに書いたと表現された一条朝前後の例について検討してきたが、造花でない花にじかに書いたと見るべ

きものはないようである。花や花びらに書くとき表現されたものは、造花にじかに書いたり、あるいは、色紙や短冊などに書いて、それを実の花につけたり、造花につけたりしたものとして理解していたように思われる。

注

(1) 本稿で略称した注釈書は次の通りである。

春曙抄

北村季吟『枕草子春曙抄』

盤斎抄

加藤盤斎『清少納言枕双子抄』

金子評釈

金子元臣『枕草子評釈』

塩田評釈

塩田良平『枕草子評釈』

大系

池田亀鑑・岸上慎二・秋山虔『日本古典文学大系』枕草子

全講

池田亀鑑『全講枕草子』

全集

松尾聡・永井和子『日本古典文学全集』枕草子

全注釈

田中重太郎『枕冊子全注釈』

解環

萩谷朴『枕草子解環』

新大系

渡辺実『新日本古典文学大系』枕草子

新全集

松尾聡・永井和子『新編日本古典文学全集』枕草子

(2) 『秘められたメッセージ』『蜻蛉日記』の消息の折り枝―(国文目録第二十三号、平6・1)

Writing on a petal

Ritatsu YAMAMOTO